

# 廣松渉『資本論の哲学』を読む<sup>1)</sup>

- - 価値形態論を中心として - -

田中 史郎(宮城学院女子大学)

はじめに

1. マルクスの種々の「価値形態論」
2. 廣松「価値形態論」の構造
3. 廣松「価値形態論」の前提と課題
4. 二人のマルクス
5. むすびにかえて

はじめに

廣松渉氏の『資本論の哲学』は、「資本論の哲学」と銘打っているが、その内容からするとマルクス『資本論』全体の哲学的考察ではない。『資本論』の「商品論」なにかんづく「価値形態論」を軸とした検討に特化している。廣松氏の言葉によれば、「『資本論の哲学』の外延はもとより是に盡きるものではないが、『商品世界論』を管制高地とすることによって、慧眼な読者には著者の抱懐する『資本論の哲学』の大宗を容易に表象して頂ける筈である。」(『資哲』頁)というわけである。

こうした前提には、「商品論」、「価値形態論」こそは、『資本論』のそして「資本論の哲学」の要をなすという認識が背後に存在していると思われる。じじつ、「価値形態論」は単に経済学ばかりではなく、哲学をはじめ他の分野の論者等にとっても大きな課題として古くから検討されてきた。価値形態論を前提としてそれを応用するような研究も種々なされてきたのである<sup>2)</sup>。しかし、それらの試みは、全てが成功しているわけではない。我々からすれば、そもそも価値形態論に対する理解の不十分さが最大の原因なのではないかと思われる。

したがって、本稿では「価値形態論」を中心として、廣松渉『資本論の哲学』を解読してゆきたい。なお、本文では敬称等は全て省くことにする。

## 1. マルクスの種々の「価値形態論」

廣松渉『資本論の哲学』を正面から検討する前に、まずマルクスの「価値形態論」に関して予備的なことを確認しておこう。

価値形態論とは、何よりも貨幣の生成を解く論理だといってよい。そして、すでに述べたように、経済学ばかりではなく諸々の分野からも様々なアプローチがなされてきた。しかし、それらは全てが必ずしも成功しているとはいいがたく、その一つの原因は価値形態論に対する理解にあると述べた。だが、さらにいえば、マルクスの「価値形態論」には、形式的には三種類の、そして内容的には二種類のものが存在することにあるといってよい。そして、これらが微妙に異なりながら存在するが故に、議論が錯綜している感を否めないのである。

そこで、まず形式的には三種類の「価値形態論」が存在することを確認しておこう。その第1と第2は、いずれも『資本論・初版』に展開されているものである。前者がその「本文」の「価値形態論」であり、後者はその「付録」としてつけられている「価値形態論」である。『資本論・初版』には、同一の書物でありながら、このように、「本文」と「付録」の二つの「価値形態論」が存在する。そして、第3のそれは、『資本論・再版』以降の「価値形態論」である<sup>3)</sup>。

このように形式的には三種類の価値形態論が存在するが、議論を分かりやすくするために論

点を先取りして述べておけば、それらを内容から判断すると、価値形態論は二種類ということになる。すなわち、『資本論・初版』の二つの「価値形態論」は、同一の書物であるにもかかわらず、決定的に異なっており、それに対して、『資本論・再版』以降の「価値形態論」は、『資本論・初版』「付録」のそれと同一である。『資本論・再版』以降では、『資本論・初版』「付録」の「価値形態論」が採用されているといえる。この点はすでに多くの研究者の通説になっている事柄であり、改めて強調する必要もないが、後の議論のために確認しておきたい。なお、本稿の「参考資料」としてこれらと関連する部分を掲載しているので、参照されたい。

もっとも、「価値形態論」は『資本論』に初めて登場するものの、その萌芽は『経済学批判』においても見出すことができる。しかし、ここではこの問題に関してはとりあえず立ち入らないことにする<sup>4)</sup>。

## 2. 廣松「価値形態論」の構造

### (1) 廣松「価値形態論」の方法論的な構え

前提的な議論を切り上げて、本稿の主題である廣松『資本論の哲学』の「価値形態論」の検討に入ろう。本書においては、第 形態以下の叙述が簡略に扱われているが、それに反して、方法論的な問題と「第 形態」に関しては繰り返し議論が展開されている。以下、コメント風な廣松「価値形態論」を検討してゆきたい。

まず、その方法論的な問題から吟味を開始しよう。廣松は以下のように述べている。

「価値形態論は、「学知」の立場からするフュア・ウンスな論考であるといっても、当の学的意識がヘーゲルの「傍観者」Zuseher のように当事主体たちに対して傍観的 zusehend に臨むにとどまるならば、そもそも相対的価値形態と等価値形態との区別と対立ということが存立しえないことになる。...マルクスの学知的意識がリンネル商品を相対的価値形態として、そして上衣商品を等価値形態として論考を進めうるのは、リンネル所有者の側に視座を構えるかぎりにおいてである。」(『資哲』132-3頁)

この引用文には、廣松「価値形態論」の方法的な構えが十分に示されている。これまでの古い通説では、価値形態論とは価値がいかにか十全に表現されるかを辿る論理だという理解があったが、廣松はこれを一蹴している。「価値形態論」を演劇にたとえると、舞台回しをする「学知」に操られて、二つの極の当事者が登場しているが、この「学知」が単なる「傍観者」ならば、この二つの極の当事者は対等なものとしてみえよう。しかし、マルクスが二つの極の当事者をそれぞれ「相対的価値形態」と「等価値形態」として区別しているのは、「学知」がどちらかの側に身を寄せての分析であると理解される。そして、この場合にはリンネル所有者、つまり相対的価値形態の側に視座を構えてのものであるというわけである。

こうした方法は、かつて宇野弘蔵が提起した方法を彷彿させる。すなわち、宇野は価値形態論の相対的価値形態に立つ商品にその所有者の欲望を想定することを主張したが、廣松の「リンネル所有者の側に視座を構える」という方法は、宇野の提起と同様といつてよいと思われる<sup>5)</sup>。価値形態論においては、「相対的価値形態」と「等価値形態」との非対称性ないし対極性が要をなす前提であり、この点は繰り返し強調されてよい。その意味で、廣松のこの方法は十分に理解できるし、我々はこの点を高く評価したい。

しかし、以下の展開ではこうした方法が必ずしも活かされていないように思われるのであって、疑問を禁じえない。続けてみてみよう。

### (2) 廣松の第 形態

廣松は、「第 形態」を分析しつつ、以下のように述べている。

「...20エルレのリンネル=1着の上衣という事態は、事実の問題としていえば、A(

リンネル所有者--引用者)が1着の上衣と引換えに自己の生産・所有物たる20エルレのリンネルをB(上衣所有者--引用者)に引渡すことに同意しているということ(Bの立場からいえば、20エルレのリンネルと引換えに1着の上衣を引渡すことに合意しているということ)唯これだけのいたって簡単な事態である。」(『資哲』139頁)

みられるように、廣松は、第 形態をA(リンネル所有者、相対的価値形態)とB(上衣所有者、等価形態)の両当事者が交換に合意した事態であると規定している。したがって、Aの立場から成立する事態は、Bにおいても同様なことになると思われる。これを、廣松の「交換の合意の論理」としよう。しかし、そのような論理は成立するだろうか。もし仮に、第 形態がこのように交換の合意の成立したものとすれば、これで一件落着であり、次の形態に移行する必然はなくなる。いい換えれば、交換の合意が成立すれば、そもそも貨幣の必然性もなくなるのではないだろうか。

周知のように、宇野は価値形態論に商品所有者を想定するという方法を提起したが、それは、積極的には相対的価値形態の側においてである<sup>6)</sup>。第 形態におけるA(相対的価値形態)の行為は、B(等価形態)が眼前に存在するか否かにかかわらず一方的に生ずるものなのである。こうした事態を宇野は「商店の商品がいずれも貨幣によって買われる前にその価格を表示しているのと同様である。」(旧『原論』、33頁)と述べている。つまり、「交換の合意の論理」などは成立する筈もない事態なのである。

先に、価値形態論における相対的価値形態と等価形態の非対称性ないし対極性を強調したが、その具体的な内容は以上のようなものだといえよう。廣松にあっては、事実上この点を認識しつつも、それがここではあまりに軽視されたまま終わっているのではないか。

ところで、廣松はここで、価値形態にさらに分析しつつ、労働の問題を絡ませて以下のようにいう。

「リンネルの生産・所有者Aにとっては、彼の具体的労働の所産たるリンネルも、取引交渉の相手たる上衣の生産・所有者Bも、その労働所産たる上衣も、さしあたっては、いずれも具体的な定在の相で現前する。とはいえ、当面の関係行為においては、AにとってBは謂うなれば没人称化されており、das Man でしかない。...Aにとっては、身体髪膚を具えたBが、人間的労働主体という抽象的一般者=類の一具現として現前する。(この相での上衣の生産・所有者を B as [B] と標記することにしよう)。ところで、そのとき、かの上衣は、かかる B as [B] の労働生産物として、これまた、Aにとっては抽象的人間労働の一体化物として現前する。(この相での上衣を b as [b] と標記することにしよう)。以上、Aの側の視座に立って für uns にみた事態は、Bの側と共軌的である。A自身がBに対して対他的には A as [A] として、彼のリンネルもBに対して対他的には a as [a] として映現する。かくして、Aにとって対自的には、B as [B] とその労働の対象化物たる b as [b] が現前し、Aにとって対他(対B)的には、自らが A as [A] として、またaが [a] として存立する。この対自-対他関係において、b as [b] がaと等値されることに媒介されて、Aにとってもまたaが対自(対私)的にも a as [a] として措定される。

ここにおいて、a as [a] と b as [b] とは、a b という相違性 Verschiedenheit の契機と[a][b]という同一性 Identität の契機を内包しつつ、しかも a as [a] と b as [b] とが等値 gleichsetzen されていることにおいて、Aにとって対自的には [b] たる b が [a] の等価物として、価値 [a] を相対的に表現する現象形態となる。かかる関連の共時論的構造において、Aの視座にとって対自的に、自己の商品が相対的価値形態、相手の商品が現象形態のまま等価形態として現存するわけである。<sup>7)</sup>」(『資哲』145-6頁)

廣松のいうように、「当面の関係行為においては、AにとってBは謂うなれば没人称化されており、das Man でしかない。」という点は納得がいく。換言すれば、Aにとっては、Bはそ

れが誰であろうとかまわないのであって、自らの要求を満たしてくれれば十分なのである。先の宇野の言葉を擦れば、商店の商品は、誰が買ってくれようと、買ってくれる人がいればよいということである。しかし、以下の点には疑問を感じる。

廣松は、「かの上衣は、... Aにとっては抽象的人間労働の一体化物として現前する。」と述べているが、そうだろうか。この場合、上衣はBの所有物であることは確かだが、それが抽象的人間労働の一体化物とされる根拠はどこにあるのか。Bが上衣の所有者だとしても、Bはその上衣の生産者である必然性はない。他の誰かの労働生産物でも、Bがその所有者であることはあり得ることである。Aにとっては、Bは「没人称化されており、das Man でしかない」とともに、bはそれを誰が生産しようとかまわない筈である。また、そもそも、Aにとっては、bは誰の労働生産物であるか知る由もないのである。

廣松にこのような混乱をさせた原因は『資本論』にもあろう。マルクスは、『資本論』において、価値形態論の前に、商品の二要因論、労働の二重性論において、いわゆる価値実体論を展開しているが、それには、宇野が提起したように<sup>8)</sup>、またここで若干あきらかにしたように、無理がある。廣松は、いわばマルクスに引きずられて、上のような議論をしたといえるが、そのようにすることは必要でもないし、可能でもないのである。

さらに、もう一つの疑問点を提起しておきたい。廣松は、「Aの側の視座に立って...にみた事態は、Bの側と共軌的である。」と述べている。ここでは、Aからみた事態は、それをBからみても同様に成立するとしているというわけだ。これは先の「交換の合意の論理」と同様のものである。しかし、こうした論理が成立しないことはすでに述べたとおりである。廣松が、先に指摘した、価値形態おける対極性を強調した論理は、残念ながらここではみられない。廣松自身にあってもかなりの混乱があるといわざるを得ない。

### (3) 廣松の第 形態

以上で、廣松の基本的な議論は出されているが、続いてその第 形態についてみてみよう。廣松は次のように述べている。

「...すなわち「20エルレのリンネル = 1着の上衣、または = 10ポンドの茶、または = 2オンスの金、または = 云々」といった無限系列へと「展開された」「総体的な価値形態」をみてみよう。ここでは、もはや、相手Bは、製茶労働の主体でも、裁金労働の主体でも、〇〇労働の主体でも、つまり、労働の種類にはインディファレントたりうる。このような gleichgültig な他者との対他的被媒介性において、今やリンネルも対自化される。」(『資哲』147頁)

ここでも幾つかの疑問が生ずる。すでに示したように、価値形態論を交換の合意が成立したものと規定することは正しいとは思われないが、もしそうだとしたら、第 形態の「または」、そして「=」はどういう意味か。これは、マルクスに対する疑問だが、それを無批判に引用している廣松にも向けられよう。

すなわち、マルクスも廣松も、第 形態の価値式を「または」(oder)で結んでいるが、そのように考えられるのか。先に、価値形態論においては「交換の合意の論理」は成立しないと述べたが、ここではあえてそれを適用してみよう。そうだとすると、先の「交換の合意の論理」から、ここでは上衣、茶、金などの登場する商品所有者と全て交換の合意がなされているということになる。そうなるのであれば「または」(oder)ではなく「そして」(und)ということになるのではないか。それとも、リンネル所有者は、はじめに上衣所有者と交換の合意をしたものの、次に茶所有者やさらにそれ以下の所有者が登場し、それと交換の合意をすると、先の合意を次々と破棄するともいうのであろうか。これはあまりに奇妙な想定というほかない。

また、仮に、「交換の合意の論理」を活かして、ここでの価値式を「そして」(und)によって結ばれているものとしよう。しかし、その場合にも矛盾は生ずる。廣松のいうように、第 形態を「無限系列へと「展開された」「総体的な価値形態」とし、またそれらが「そして」(und)で結びつけられているとすると、それに対応するリンネルは無量大の数量を要することに

なる。このようなことは到底成り立ちえない。

以上みたように、どのように考えても廣松の第 形態は、その前提でナンセンスな想定をしなければならぬという結果になる。したがって、引用に後段に示されている労働との絡みを説く議論も同様といわざるを得ない。

#### (4) 廣松の第 形態

すでにみたように、これまでの形態に関して疑問を呈してきたが、その第 形態についても同様な点を指摘せざるを得ない。

「一般的価値形態」は単なる数式としてみれば、第 形態における両辺を入れ替えたものにすぎない。そこで、マルクスに対して悪意ある批評家たちは、「左辺と右辺とを入れ換えても事態には何らの変化もない筈だ。しかるに、マルクスは、この変形式に特別な意味をもたせている。…」…上空飛翔的に眺めれば、ないしはまた、当事主体たちの即自的な意識にとってみれば、第 形態と第 形態とは同一事であるが、しかし、当事主体の視座に立って対自的な事態と対他的な事態との区別と統一を分析するフュア・ウンスな学知にとっては、両者は異相である。」(『資哲』148-9頁)

まず、引用の後半部分から検討しよう。廣松は、みられるように「上空飛翔的に眺め」ることと「当事主体たちの即自的な意識」を同一の相とし、それに対して「学知」を異相としている。しかし、むしろ、「上空飛翔的に眺め」ることと「学知」とが同相で、それらと「当事主体たちの即自的な意識」とが異相ではないか。というのは、相対的価値形態と等価形態とは非対称的ないし対極的な存在であり、当事者がどちらの側に立たされるかは決定的に異なることであるからに他ならない。にもかかわらず、こうした混乱が生じたのは、おそらくは廣松の先の「共軌的」という論理に引きずられたものと考えられる。ここでも矛盾が生じているわけである。

さて、引用の前半の検討に移ろう。廣松は、第 形態において、等式の左右辺の入れ換え、つまり逆転を前提として、その後の事態に対する疑問を提起している。しかし、どうして等式の左右辺の入れ換えや逆転が可能なのか問われるべきではないか。これは、価値形態論の研究史上もっと多くの議論を呼んだ問題であり<sup>9)</sup>、その点の考察がみあたらないのはいかにも不十分である。邪推すれば、この問題を無視したのは、この問題に立ち入れば、そもそもこうした左右辺の入れ換えや逆転が不可能だということを示さざるを得ないが故のこととも思われる。廣松自身が提起した「相対的価値形態」と「等価形態」との非対称性ないし対極性の論理は、ここでは全く消滅しているのである。

#### (5) 廣松の貨幣形態

以上、廣松の第 形態までみてきた。ついで貨幣形態にかんして検討すべきであるが、実のところ、価値形態論を主題的に考察している本書の第7節では、価値形態論の検討は第 形態で終わっている。貨幣形態に関しては、第6節で「簡単な価値形態は貨幣形態の萌芽である」(マルクス)という意味のことが述べられているに留まる。そして貨幣の導出に関しては交換過程論に委ねられる(第11節参照)という構成になっている。

廣松にあっては、その価値形態論は貨幣形態を導出しないまま終了しているのである。これではあまりに不十分としかいいようがない。

#### (6) 小括

これまでの廣松に対する検討をまとめておこう。廣松は、中心的に価値形態論を考察した第7節の末尾で結論的に以下のように述べている。

「価値形態論の基幹的構制は、結局のところ、Aにとって対自的に（B as [B] の生産物たる）b as [b] が（対他的にはA as [A] たる自己の生産物）a as [a] と等値されているという事態、...という四肢的な構造的事態に帰趨する。」（『資哲』149頁）

廣松の価値形態論は貨幣形態を導出せずに終わっていることをすでにみた。我々にとってはそうした価値形態論は全く不十分なものと思われるが、廣松にとっては、引用のように、価値形態論の結論はその「基幹的構制」を確認することにあるようである。そしてこの「基幹的構制」とは「Aにとって対自的に... b as [b] が... a as [a] と等値されているという事態、...という四肢的な構造的事態」ということであろう。

これを「基幹的構制」というのであれば、価値形態論は第 形態だけで完了してしまうということになるのではないか。じじつ廣松の価値形態論は大部分が第 形態の分析に費やされているのであるが...。しかし、これでは本来の価値形態論の課題を満たしたことはないことはいまでもない。残念ながら、廣松の価値形態論の構造を逐次的に検討すると、このように評価せざるを得ない。

では、なにゆえこのような事態になったのか。節をかえて検討しよう。

### 3. 廣松「価値形態論」の前提と課題

価値形態論に対して廣松がこのような理解をしたことには前提があり、また、そこには固有の課題設定があると思われる。これらを検討してみよう。

まず、廣松の価値形態論の前提は以下の引用に示されている。

「価値形態論（は--引用者）...20エレのリンネルが1着の上衣に値するという等値 Gleichsetzung の関係が存立しているという所与の事態から出発すればよい。」（『資哲』132頁<sup>10）</sup>）

みられるように、廣松は価値形態論を交換の合意成立後の事態とみなしている。これは、『資本論・初版』の「長時間にわたって商談したのち、ついに彼らの意見が一致して、Aは20エレのリンネルが1着の上衣に値するといひ、Bは1着の上衣が20 エレのリンネルに値するといひ。」（『初版』131頁）と述べられている箇所を論拠にしたものであろう。確かに、『資本論・初版』ではそのように述べられており、そのように理解できるところがある。しかしこの文言は『初版』にしか存在しない点に留意されたい。

そして、マルクスの文言から離れていえば、すでにみたように、こうした理解を価値形態論の前提におくこと様々な奇妙な想定をせざるを得ないことになった。たとえば、こうした前提からすると価値形態は第 形態で終了し、貨幣は導出されないことにならざるを得ないし、また、第 形態においてもナンセンスな想定をせざるを得なかったのである。

では、なにゆえこのような前提を廣松はおくことになったのか、その背後には、価値形態論の位置づけないし課題設定の問題があるのではないだろうか。廣松は次のように述べている。

「『初版』では、価値形態論の...末尾には「...価値形態が価値概念から発現することを証明することであった」（『初版』77頁）という文章（<『初版』の課題規定>--引用者）が見出される。」（『資哲』69頁）

廣松は、マルクスを援用しつつ、価値形態論の課題は「価値形態が価値概念から発現することを証明することである」ということを述べている。この文言も『資本論・初版』にだけ存在するものである点に注意されたい。そして、廣松は、『資本論・再版』にある価値形態論の課題規定、つまり価値形態論の課題を「貨幣形態のゲネシスを跡づけること...」（『再版』65頁）とした部分（<『再版』の課題規定--引用者>）を引用しつつも、以下のようにいう。

「...価値形態論におけるマルクスが、もっぱら価値形態のゲネシスだけを論考していると受取るならば、それは価値形態論の矮小化に通ずるであろう。」(『資哲』69頁)。

「...附録を含む初版と再版との理論構成は基本的な構造に即してみるかぎり、同一であるように看取される。」(『資哲』114頁)

第1の引用にみられるように、廣松は、価値形態論の課題を「価値形態のゲネシスだけ」におくのは価値形態論の矮小化だという。この表現にはやや含みがある。廣松は、価値形態論の課題を「価値形態のゲネシス」におくことは認めつつも、その課題は単にそれに留まらない、ということを主張しているようにもみえる。しかし、これまでの検討から明らかのように、廣松の価値形態論では、そもそも貨幣の導出は示されておらず、そもそもの課題に答えているとはいえない。

ここでの廣松の積極的な主張は、先の価値形態論の課題は「価値形態が価値概念から発現することを証明することである」とする<『初版』の課題規定>にこそあると思われる。すなわち、<『初版』の課題規定>の方を重視しているといえる。

<『初版』の課題規定>は『資本論・初版』のみにみられ、それは<『再版』の課題規定>とは異なるものであると、我々は把握しているが、廣松はそうではない。廣松は、第2の引用にみられるように、「...附録を含む初版と再版との理論構成は基本的な構造に即してみるかぎり、同一である」と考えているようである。資本論の理論構成は『初版』も『再版』も同一だとしている。繰り返しになるが、廣松にとっては、<『初版』の課題規定>と<『再版』の課題規定>とは異なるものではないという認識があるといえよう。そして、後者<『再版』の課題規定>を前者<『初版』の課題規定>に引きつけて理解しているのである。

このように整理できるとすると、これまでの議論を詰めていけばこの点をどう理解するかにかかっている。つまり、『初版』から『再版』にいたって、価値形態論の課題や位置づけに変更があったか否か、である。そして、それをどのように評価するかである。

#### 4. 二人のマルクス

これまでの検討を通して問題は以上のように絞られたといえよう。すなわち、廣松のように、『初版』と『再版』の価値形態論の課題は同一であって、<『初版』の課題規定>を重視するか、それとも、『初版』と『再版』の価値形態論の課題は異なっており、本来の価値形態論の課題は<『再版』の課題規定>にあるとするか、問題はここにある。

廣松『資本論の哲学』の検討から離れて、こうした問題を考察しよう。そうすることで、我々の主張も学説史的な根拠を得るものとする。

##### (1) 『資本論・初版』(本文)の構成と価値形態論

順序にしたがって『資本論・初版』(本文)からみてみよう。まず、結論的にいえば、『資本論・初版』(本文)の構成は、「章」や「節」などの区切りはないが、内容的には、「価値実体論(商品の二要因・労働の二重性) 価値形態論 交換過程論 貨幣論」、といよようになっていいる。そして、貨幣の導出は、価値形態論ではなく交換過程論で行うという体系構成の基でなされているといえよう。

その根拠は以下のようなものである。その第1は、『資本論・初版』(本文)では、「商品の二要因」・「労働の二重性」において、蒸留法で価値実体を論じていることである。もちろん、二商品の関係から価値の実体を導出することは本来不可能であるし、当然ここでも成功しているとはいえないが、ともあれこのような試みはなされている。

そして、その第2は、廣松も引用しているように、『資本論・初版』では、価値形態論の課題は「価値形態が...発現すること」と規定している点である。いわゆる<『初版』の課題規定>が示されているのであって、貨幣の導出を価値形態論に求めるといふ課題は設定されてい

ないのである。

また、第3に、実際に、『資本論・初版』（本文）の「価値形態論」の末尾は、「第 形態」であり、「貨幣形態」ではないということである。周知のように、第 形態とは、第 形態の左右辺を逆転して導出した第 形態を再度逆転したものであり、結果的には多数の第 形態が併存する形態であって、貨幣形態にはいたっていない。ここでの価値形態論はそうした第 形態で終わっているのである。

ところで、第4に、このような構成ゆえ、交換過程論の導入さいし、いわゆる＜交換過程への「移行規定」＞が存在することである。この「移行規定」とは、「商品は、使用価値と交換価値との、したがって二つの対立物の、直接的な統一体である。…諸商品の相互の現実の関係は、諸商品の交換過程なのである。」（『初版』94頁）という部分を指す<sup>11)</sup>。そして、こうして導かれた交換過程論において、「諸商品の相互…関係」から貨幣を導出するという論理が開示されるという構成になっているのである。

すなわち、第5に、交換過程論で貨幣の導出が試みられていることである。交換過程論での貨幣の導出の論理とは以下の引用で示される内容に他ならない。

「…商品所持者たちは、当惑のあまり、ファストのように考え込む。太初に業ありき、だから彼らは、考えるより前に、すでに行っていたのである。…ただ彼らが自分たちの商品を一般的等価物として何らかの別な商品に対立的に関係させる…。…こうして、この商品は--貨幣になるのである。」（『初版』99-100頁）

だが、こうした論理は貨幣の導出を満たすものではないことは明らかであろう。「太初に業ありき」というロジックだけでは、それに成功しているとはいえないのである。

ともあれ、しかし、『資本論・初版』（本文）にあってはこのような体系構成によって、すなわち、価値形態論ではなく交換過程論において貨幣の導出が試みられていたといえるのである。

## （2）『資本論・初版』（付録）の価値形態論

しかし、周知のように、『資本論・初版』には「付録」の価値形態論が存在する。そしてそれは、「本文」の価値形態論とは決定的に異なり、末尾は貨幣形態となっている。もちろん、「付録」の価値形態論では、貨幣形態の一步前の第 形態の導出方法が問題となる。それはいわゆる「逆転論」でなされているのであって、すでに多くの指摘があるが、とりあえず立ち入らない。

ここで注目すべきは、貨幣の導出を巡って、すでに二重記述、ないし矛盾が潜在している事態である。すなわち、「付録」の価値形態論がつけられることによって、貨幣の導出には、交換過程論と価値形態論との二重の論理が存在することになったのである。むろん、それが顕在化するのには『資本論・再版』になってからであるが、内容的にはすでにここに問題が孕まれているといつてよい。

そうだとすると、何故、マルクスがわざわざ問題を生じさせるような「付録」を書いたかが問われることになる。こうした点は『資本論・再版』だけを検討しても分かりにくいので、『経済学批判』に立ち返ってそこから『資本論・初版』の成立過程を考察するとそれなりに明らかになる<sup>12)</sup>。しかし、ここでは立ち入らないことにする。

ともあれ、マルクスは矛盾を孕む価値形態論の「付録」をあえて付け加えたことをここで確認しておきたい。

## （3）『資本論・再版』の構成と価値形態論

『資本論・再版』の構成は、一見すると『資本論・初版』と同一である。もちろん、『資本論・初版』では「章」や「節」などの区切りはなかったが、内容的には同様とみなしてよい。

『資本論・再版』では、明示的にも「価値実体論（商品の二要因・労働の二重性） 価値形態



論 交換過程論 貨幣論」という構成になっているが、これは『資本論・初版』から引き継がれたものである。そのかぎりでは、廣松が、『資本論・初版』と『資本論・再版』を同一のものとなしなしたことは正しい。

しかし、看過できないことは、ここでの価値形態論は「付録」のそれが採用されていることである。交換過程論は、『資本論・初版』と『資本論・再版』では同様であるにもかかわらず、である。

このようになると、貨幣の導出を巡っての先の問題、すなわち、二重記述ないし矛盾の問題が顕在化することになる。『資本論・再版』は同一の書物でありながら、貨幣の導出が、価値形態論と交換過程論との二つの箇所で行なわれるという事態になっているのである。この点を巡っては、多くの解釈や議論が展開されているので立ち入らないが、こうした二重記述の存在は通説の認めるところである。

したがって、これをどのように理解すべきかが問われることになる。すなわち、このような二重記述は、誤りなのか、それともそこに何らかの意味を見出すことができるのか、ということである。我々は、この二重記述に関して、それを単なる矛盾ではなく、不十分ながらマルクスの理論的な発展の結果であると考え。すなわち、『資本論・初版』から『資本論・再版』にいたる過程で、論理的な変更があったのではないかと考えるわけである。この点を廣松は否認しており、我々との対立点である。

そこで、そのように理解できる論拠を以下に示そう。その第1は、まず、マルクスは、『資本論・再版』に、矛盾を孕む「付録」の価値形態論をあえて採用したことである。おそらく何らかの意図がなければこのようなことはなかったといえよう。

そして、第2は、価値形態論の課題設定が、『資本論・初版』と『資本論・再版』とは異なっているのではないと思われる点である。というのは、すでにみたように、『資本論・初版』には、『資本論・初版』に存在した<『初版』の課題規定>がなくなり、貨幣のゲネシスを強調する<『再版』の課題規定>が加えられているからである。

また、第3に、先のこととも関連すると思われるが、『資本論・初版』に存在した交換過程論を貨幣成立論として導く<交換過程への「移行規定」>が、『資本論・再版』ではなくなっていることである。これは、交換過程論そのものは『資本論・初版』と『資本論・再版』で同一であるものの、その位置づけに変更があったことを示すものと考えられるのである。

すなわち、結論的にいえば、マルクスは、『資本論・初版』から『資本論・再版』にいたって、貨幣の導出の論理を「交換過程論」から「価値形態論」に求めるという方向に変化させたといえよう。そして、そのようになると、「交換過程論」は、いわば人体の「盲腸」のようなものになるのである。

#### (4) 小括

本節の議論を小括しよう。このように、マルクスは貨幣の導出の論理を「交換過程論」から「価値形態論」へと変更したと考えられるすれば、『資本論・初版』や廣松とは異なり、価値形態論の前提は交換の合意が成就した後の出来事ではなくなる。というのも、すでに指摘したように、交換の合意が成就していれば、貨幣の必要はないのであって、価値形態論の展開も不要なものに、あるいは不可能なものになるからだ。

また、そうだとすれば、交換の合意の前提となる価値実体論も、価値形態論の前に展開される必要がなくなる。周知のことなので、これまで述べなかったが、交換の合意にはいわゆる価値実体論が前提にされていることはいままでもない。反対に言えば、価値形態論に交換の合意を持ち込む必要がないならば、その前提となる価値実体論も不要ということになるのである。消極的にいえばこうだが、積極的にいえば、そもそも「蒸留法」による価値実体の論証は不可能なのである。いずれにしても、価値形態論は価値実体論を前提として展開することなど全くない。その意味で、『資本論・再版』も未だ不十分な点を多々残している。

このように『資本論・再版』にあってもやや錯綜していることから明確なように、この段階ではいわば古いマルクスと新たなるマルクスの二人のマルクスが存在しているといえよう。そして、そうだとしたら、したがって、あるべき『資本論』は、新たなるマルクスの示した方向

性を積極化するものでなければならない。貨幣の導出にあつては、交換過程論ではなく、それを価値形態論に求めるという方法に一元化すべきであろう。いい換えれば、商品・貨幣論においては、交換過程論は不要となり、それは、「商品の二要因論（価値実体論を含まない） 価値形態論 貨幣論」という構成になるのではないかと思われるのである。

## 5. むすびにかえて

『資本論の哲学』の主な対象が価値形態論であるので、これまでそれを中心に検討してきた。このようにみると、廣松は、マルクスの示した価値形態論の積極化の方向を把握することに失敗した点に難点があるといえる。古いマルクスの論理をそのまま固持しているといえよう。錯綜しながらも、マルクスは『資本論・初版』（本文）同（付録）そして『資本論・再版』へと価値形態論の内容およびその位置づけを変更し改良していったが、この点に関する考察の不十分さを指摘せざるを得ない。もし仮に、こうした点を明確にしつつ「資本論の哲学」を構成したならば、本稿の冒頭で示したような、「相対的価値形態」と「等価形態」との非対称性ないし対極性を強調した論理で貫かれたものとなろう。

とはいえ、廣松の提起した方法に学ぶべき功績もある。その最大の功績は、本稿の冒頭でみたように、学知と対極的な当事者の関係から価値形態論展開するという方法を提起したことだといえよう。じつは、これまでの廣松に対する疑問や批判は、ある意味でこの方法に基づいているのである。

### 【付記】

みられるように、本稿はかなりの部分が廣松理論に対する批判になった。しかし、これは廣松氏自身を落とし込めるためではない。あくまでも理論的問題である。氏自身も、つまらぬエピソードの論文よりも、こうした批判を受け留められるであろう。生前、氏とは研究会等で数回お会いしたことがあるが、まだそのころは小生はあまりに未熟であったので対等な議論などできようもなかった。もし氏が存命ならば、本稿をもって氏と直接に議論を展開したと考えるが、もはやそれは不可能である。残念でならない。

- 
- 1) 本稿は、「社会理論学会」(第12回総会・研究大会、2004年11月27日)における報告を基に論文としてまとめたものである。
  - 2) 参考文献にあるように、柄谷行人、岩井克人、吉沢英成、今村仁司、浅田明、三浦つとむ、青木孝平、パシュカーニス、などの研究をあげることができよう。岩井、吉沢は貨幣論として価値形態論を問題化しているが、柄谷や今村、浅田は価値形態論を通して社会秩序の成立の論理を模索し、そして三浦は価値形態論を文法論に応用してしている。また、青木、パシュカーニスはそれを法の生成メカニズムの解明に用いている。これらの試みには成功しているものもあれば、そうでないものもある。だが、価値形態論はそれだけの広がりや深さを具備したロジックであることを強調してよいと思われる。
  - 3) 『資本論』の「現行版」は「第4版」だが、「第3版」「第4版」はいずれもエンゲルスによって若干の字句的な訂正が加えられたものであり、基本的には「再版(第2版)」と「第3版」そして「現行版(第4版)」は同一である。
  - 4) 『経済学批判』に「価値形態論」の萌芽が存在する点に関しては、田中[1991]第1編・第1章を参照されたい。

- 5) 宇野がこうした論理を初めて明らかにしたのは戦後まもなくの研究会でのことである。そこで、宇野は以下のように述べている。「リンネルが相対的価値形態にあって上衣が等価形態にあるという場合、リンネルは何故上衣を等価形態にとるに至ったか、それにはリンネルの所有者の欲望というものをも前提しないでよいだろうか。」(宇野・向坂編[1959]157頁)。ここでの発言が宇野「価値形態論」の出発点であることはいうまでもない。
- 6) たとえば、宇野は次のように述べている。「...簡単な価値形態(第 形態)でも一方(相対的価値形態に立つ方)に所有者を認めて、他方(等価形態に立つ方)に特定の所有者をあげない方がいい...。」(『資本論五十年』、780頁)。
- 7) 廣松の表記法を補足しておこう。大文字の「X as [X]」とは抽象的人間としての「X」というヒト、そして、小文字の「x as [x]」とはその抽象的人間の労働生産物としての「x」というモノ、という意味である。
- 8) 宇野『経済原論』の展開を参照されたい。
- 9) たとえば、大内・櫻井・山口編[1976]第 章を参照されたい。
- 10) 同様な叙述は、138頁、139頁などにもある。だが、こうした文言は『初版』にしか存在しない点に留意されたい。
- 11) これとほぼ同一の文言は、『経済学批判』の同様な箇所(『批判』42頁)にみられるが、後に述べるように、『資本論・再版』には存在しない。
- 12) 田中[1991]、第1編・第2章を参照されたい。

## 【参考資料】

### A 『資本論・初版』「本文」の価値形態論

#### 第1章 商品

##### (1) 商品

[商品の二要因]

[労働の二重性]

[価値形態]

##### (第 形態)

20エレのリンネル = 1着の上衣

##### (第 形態)

20エレのリンネル = 1着の上衣 または = u量のコーヒー または = v量の茶 または  
= x量の鉄 または = y量的小麦 または = 等々

##### (第 形態)

1着の上衣 = 20エレのリンネル

u量のコーヒー = 20エレのリンネル

v量の茶 = 20エレのリンネル

x量の鉄 = 20エレのリンネル

y量的小麦 = 20エレのリンネル

その他 = 20エレのリンネル

##### (第 形態)

20エレのリンネル = 1着の上衣 または = u量のコーヒー または = v量の茶 または  
= x量の鉄 または = y量的小麦 または = 等々

1着の上衣 = 20エレのリンネル または = u量のコーヒー または = v量の茶 または

= x量の鉄 または = y量的小麦 または = 等々

u量のコーヒー = 20エレのリンネル または = 1着の上衣 または = v量の茶 または

= x量の鉄 または = y量的小麦 または = 等々

v量の茶 = 等々

[商品の物神性]

<交換過程への「移行規定」>

##### (2) 諸商品の交換

##### (3) 貨幣または商品流通

B 『資本論・初版』 「付録」 の価値形態論

(第 形態)

20エレのリンネル = 1着の上衣

(第 形態)

20エレのリンネル = 1着の上衣 または = 10ポンドの茶 または 40ポンドのコーヒー  
 または = 1クォーターの小麦 または = 2オンスの金 または = 1/2ポンドの鉄  
 または = 等々

(第 形態)

1着の上衣	=	}	20エレのリンネル
10ポンドの茶	=		
40ポンドのコーヒー	=		
1クォーターの小麦	=		
2オンスの金	=		
1/2ポンドの鉄	=		
x 量の商品 A	=		
その他	=		

(貨幣形態)

20エレのリンネル	=	}	2オンスの金
1着の上衣	=		
10ポンドの茶	=		
40ポンドのコーヒー	=		
1クォーターの小麦	=		
1/2ポンドの鉄	=		
x 量の商品 A	=		
その他	=		

C 『資本論・再版』 の価値形態論

第 1 章 商品

第 1 節 商品の二要因

第 2 節 労働の二重性

第 3 節 価値形態

A (第 形態)

20エレのリンネル = 1着の上衣

B (第 形態)

20エレのリンネル = 1着の上衣 または = 10ポンドの茶 または 40ポンドのコーヒー  
 または = 1クォーターの小麦 または = 2オンスの金 または = 1/2ポンドの鉄  
 または = 等々

C (第 形態)

1着の上衣	=	}	20エレのリンネル
10ポンドの茶	=		
40ポンドのコーヒー	=		
1クォーターの小麦	=		
2オンスの金	=		
1/2ポンドの鉄	=		
x 量の商品 A	=		
その他	=		

D (貨幣形態)

20エレのリンネル	=	}	2オンスの金
1着の上衣	=		
10ポンドの茶	=		
40ポンドのコーヒー	=		
1クォーターの小麦	=		
1/2ポンドの鉄	=		
x 量の商品 A	=		

第 4 節 商品の物神性

<交換過程への「移行規定」がない>

第 2 章 交換過程

第 3 章 貨幣または商品流通

## 【参考文献】

- マルクス [(1859).1956] 『経済学批判』(武田・遠藤・大内・加藤訳)岩波文庫  
- - [(1867).1976] 『資本論・初版』(岡崎次郎訳)大月文庫  
- - [(1873).1968] 『資本論・再版』(全集刊行委員会訳)大月書店  
パシュカーニス[(1924).1958] 『法の一般理論とマルクス主義』(稲子恒夫訳)日本評論社  
青木 孝平 [1984] 『資本論と法原理』論創社  
浅田 彰 [1983] 『構造と力』勁草書房  
今村 仁司 [1982] 『暴力のオントロジー』勁草書房  
宇野 弘蔵 [1950-52] 『経済原論』([1973] 『宇野弘蔵著作集』第1巻、岩波書店。引用では、旧『原論』と略記  
- - [1970-73] 『資本論五十年』(上下)法政大学出版会  
宇野弘蔵・向坂逸郎編[1959] 『資本論研究』至誠堂  
大内秀明・櫻井毅・山口重克編[1976] 『資本論研究入門』東京大学出版会  
柄谷 行人 [1978] 『マルクスその可能性の中心』講談社  
田中 史郎 [1991] 『商品と貨幣の論理』白順社  
- - [1999] 「価値形態論の現在」、『状況と主体』谷沢書房、第280号(4月号)  
- - [2004] 「商品論の検討」、半田正樹・工藤昭彦編『現代の資本主義を読む』批評社  
廣松 渉 [1974] 『資本論の哲学』現代評論社。引用では、『資哲』と略記  
降旗 節雄 [1997] 『貨幣の謎を解く』白順社  
三浦つとむ [1976] 『日本語はどういう言語か』  
吉沢 英成 [1994] 『貨幣と象徴』、ちくま学芸文庫(初出、[1981]日本経済新聞社)  
吉田憲夫ほか[1996] 『廣松渉を読む』情況出版